

get 受身文の統語構造と 概念構造について

影山太郎

Abstract : As contrasted with *be*-passives, *get*-passives in English are said to have notoriously complex and unclear properties ranging from stylistic restrictions (colloquialism) to syntactic idiosyncrasies (rare occurrence of *by*-phrases and their syntactic invisibility) to semantic and pragmatic peculiarities (agency, responsibility, affectedness, subjective nuances). This paper critically examines the empirical validity of those alleged peculiarities in light of naturally occurring examples collected from BNC and other corpora and suggests an analysis of *get*-passives in which their syntactic structure is represented in tandem with their conceptual structure.

1. はじめに

現代英語には、少なくとも次の4種類の受身 (passives) があることが知られている。

- (1) a. (動詞的) 受身 : An ex-cop **was arrested** by his former colleagues. / Nicole and Jeff **are rumored** to be dating.
- b. 形容詞的受身 : I **was astounded** at the amount of mail that arrived. / He **was dressed up** in a tuxedo. / The countryside has remained **unchanged** for hundreds of years.
- c. get 受身 : John **got arrested** last night. / My cell phone **got stolen** on a train.
- d. 属性叙述の受身 : This bridge **has been walked under** by generations of lovers. (Bolinger 1975, Kageyama and Ura 2002)

本稿は平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(B)，課題番号17320067）および2006年度関西学院大学特別研究費による研究の一部分である。

このうち、通常の動詞的受身と形容詞的受身は英語の初期から存在するが、*get*受身と属性叙述の受身は、おそらく最近の数百年の間に発達してきたもので、現在においても変化の途上にあると思われる。そのため、特に*get*受身については統語論、意味論、語用論にわたって不明な点が多く、理論的な分析を進める前に実態調査が必要な状況である。本稿では、BNC(British National Corpus)を始めとするコーパスやインターネットの実例を用いて、従来、*get*受身文の特徴とされてきた諸々の性質が本当に妥当であるかどうかを検証し、それらの性質を統語論、意味論、語用論にふるい分けることによって統一的な理論的分析が可能になることを示唆する。

なお、形は同じでも、(2)のように形容詞的受身(影山(1996)の用語では完了形容詞)に*get*が付いたものは、本稿で扱う*get*受身文に該当しないことに注意しておきたい。

(2) *get interested, get fascinated, get married, get lost, get drunk, get tired, get fed up with, get crowded/congested, get tied up with, get mixed up, get upset, get involved in, get sophisticated, get dressed, get settled, get used/accustomed to, get started*

これらは、(3)のような*get+形容詞*の連鎖と変わりがない。

(3) *get busy, get ready, get tough, get better, get pregnant, get mad, get thirsty*

(2)も(3)も「受身」という意味合いではなく、*get*は*be*の起動相動詞に当たる*become*で置き換えることができる。正統な*get*受身文の場合は*become*で置き換えることができない。

(4) a. 形容詞的受身：*get/become interested, get/become married, get /become involved in*
 b. *get*受身：*get/*become arrested, get/*become hired, get/*become killed*

では、*get*受身は通常の*be*受身とどのように異なるのだろうか。従来の研究で指摘されてきた特徴を整理すると次の4点に集約できる。

- A. 文体的な特徴：get 受身は be 受身と比べて歴史的発生が遅いため、現代英語においても頻度が少なく口語体に限られるとされる。⇒第 2 節
- B. by 句の性質：be 受身と比べて、get 受身は by 句を伴うことが不可能ではないが、稀であると言われる。⇒第 3 節
- C. 受身分詞の性質：get 受身に現れる受身分詞が動詞的受身なのか形容詞的受身なのか見解が分かれている。⇒第 4 節
- D. 主語の性質：get 受身の表層の主語は意図性、コントロール性、責任性を有すると言われる。あるいは、受影（affected）という性質を持つとも言われる。更に、get 受身はその出来事に対する話者の主観的な受け止め方を表すとされる。⇒第 5 節

以下では、第 2 節から第 5 節までこれらの諸特徴を記述的に検証し、それらが統語構造に基づく性質なのか、get の語彙的な意味に起因する性質なのか、それとも語用論によるニュアンスなのかを見極める。最後に第 6 節では、これらの性質を統一的に扱うことのできる理論的な分析がどのようなものかを探る。

2. get 受身文の文体的な特徴

Quirk et al. (1985 : 161) や Givón and Yang (1994) によると、get 受身文は改まった書き言葉では稀であり、くだけた話し言葉においても be 受身より遙かに頻度が少ない。筆者の調査でも、Brown Corpus (1964 年完成) と LOB Corpus (1978 年完成) では、それぞれ 21 例と 16 例しか見つからなかった。BNC で調べると、かなりの数が出てくるが、それでも、be 受身文と比べて 20 分の 1 程度しかないようである (下表 (5) を参照)。更に Quirk et al. (1985 : 161) によると、get 受身文では動作主 (by 句) はまったく不可能なわけではないが、通常は by 句なしで使われるとされる。Harper Collins 社の Bank of English を元にして動詞の用法を記述した学習参考書 *Collins COBUILD Grammar Patterns 1 : Verbs* (1996)

でも、be 受身の文型は “be V-ed by n” と記述されているのに対し、get 受身文は “get V-ed” としか表示されていない (p. 58)。

get 受身文における by 句の生起が限られることを確認するために、試しに、*killed, arrested, invited* という 3 つの受身形を例にとって、be 受身文と get 受身文の by 句の現れ方を BNC で調べてみたところ、次のような結果が得られた。

(5) BNC における by 句の生起

	be 受身文		get 受身文	
	by 句なし	by 句あり	by 句なし	by 句あり
<i>killed</i>	2271(89%)	282(11%)	112(97.4%)	3(2.6%)
<i>arrested</i>	1347(94.5%)	79(5.5%)	82(100%)	0(0%)
<i>invited</i>	685(93.4%)	49(6.6%)	25(96%)	1(4%)

一般に、be 受身文において by 句なしの場合が 70–80% であると言われている (Kilby 1984) が、その点では、(5) の by 句なし be 受身文の比率は通説より更に大きい。しかしこれと比べても、get 受身文の場合は、by 句の出現が極端に少ないことが確認できる。

get 受身文で by 句が少ない理由として、Quirk et al. (1985: 161) は「意味的な重点が動作主より表層の主語に、行為より出来事の結果に置かれるからである」という機能的な説明をしているが、これはほとんど説得力がない。なぜなら、be 受身、形容詞的受身を含め、受身というのは総て「動作主を背景化し、それにより、被動者の状態を前景化する」(Shibatani 1985) という機能を共有するからである。なぜ get 受身文に by 句が極端に少ないのかを説明するためには、get 受身文の統語構造と意味構造を詳細に見てみる必要がある。

3. by 句の統語的・意味的特徴

Fox and Grodzinsky (1998) は、be 受身文では by 句が（たとえ表面上

は省略されていても) 統語構造に存在するのに対し, get 受身文では by 句は統語構造にもともと存在しないと論じている。その証拠となるのは、次のような PRO と再帰代名詞の解釈である。

- (6) a. The ship {was/*got} sunk [PRO to collect insurance money].
- b. It {was/*got} decided [PRO to leave].
- c. The food {was/*got} served [PRO kneeling].
- d. Food should never {be/*get} served only for oneself.

(以上, Fox and Grodzinsky 1998: 327)

(6 a) は, to collect という目的を表す不定詞の意味上の主語 (PRO) が何を指すかを示す例文で, was sunk の場合は見かけ上省略されている by 句の動作主を指すから文法的である。他方, got sunk では, PRO は意味上の動作主を指すとは解釈できない (強いて解釈すると, 表層の主語 the ship を指す)。PRO のコントローラーは統語構造で存在する要素でなければならないから, (6 a) で got sunk が非文法的であるということは, get 受身文の by 句は単に省略されているのではなく, もともと統語構造がないということになる。(6 b) の外置構文も同じことで,ここでも, get decided は元々 by 句を欠いていると言える。(6 c) は, kneeling (ひざまずきながら) という分詞構文の主語 (PRO) のコントローラーが get 受身文に欠如していることを示している。最後に (6 d) では, oneself が指すものが, be 受身文の場合には表面上現れない by 句の人物であるが, get 受身文では指す人物がない。

これらの観察から, Fox and Grodzinsky (1998) は, get 受身文の by 句は統語的資格を有さない付加詞であると結論づけている。しかしもちろん, get 受身文でも by 句が皆無ではない。先に BNC における筆者の調査結果を示したが, 更に調査を広げて Yahoo! および Google で検索すると, 各種のウェブサイトにおいて get 受身文に by 句が伴う例が数多く見つかる。そこで, これらの by 句をどのように説明するのが理論的な問題となる。

この問題に対して Fox and Grodzinsky (1998) は, get 受身文に出現す

る by 句は、be 受身文の by 句とは異なる性質のものであるという解決案を示している。すなわち、be 受身文では by 句の意味役割は主動詞（受身分詞）の項構造から直接に引き継がれる (θ -transmission) のに対して、get 受身文の by 句は、動詞から意味役割をもらうのではなく、by 句自体が固有の意味役割を担っているという考え方である。固有の意味役割を持つ by 句の一例は、Grimshaw (1990) が指摘した名詞化構文における by 句である。Grimshaw の用語で言うと、be 受身文の by 句は元来、項であったものが抑制された項付加詞 (Argument-adjunct) であるが、名詞句に現れる by 句はそれ自体で特定の意味役割を有する付加詞である。

- (7) a. the imprisonment of refugees by the government
- b. the destruction of the city by lightning
- c. a book/article/painting by John

(Fox and Grodzinsky 1998 : 325)

Fox and Grodzinsky (1998 : 325) は、純然たる付加詞としての by 句の意味役割を Affector (影響者) としている。Affector とは、Agent (7 a), Instrument (7 b), Creator (7 c) である（しかし (7 b) の by lightning は Instrument ではなく Natural force (自然力) とすべきであろう）。名詞句に現れる by 句の意味をこのように限定すると、(8) の by 句は自動的に排除される。

- (8) a. the fear of Harry (*by John)
- b. the respect for Mary (*by John)
- c. the receipt of the package (*by John)

(Fox and Grodzinsky 1998 : 325)

(8 a, b) の by John は Experiencer, (8 c) の by John は Recipient で、どちらも Affector ではない。

Fox and Grodzinsky (1998) は、この考え方を用いて、(9 a, b, c) の get 受身文で by 句が非文法的になる理由は、上の (8 a, b, c) の名詞句における by John が非文法的であるのと同じであると主張している。

- (9) a. Harry {was/*got} feared by John.
 b. Mary {was/*got} respected by John.
 c. The package {was/*got} received by John.

(Fox and Grodzinsky 1998: 328, fn. 21)

しかしながら、get feared/respected/received by という構文は、インターネットの検索では少なからず見つけることができる。

- (10) a. She wonders how he **got feared by** everyone, but she knows why.

(<http://www.fanfiction.net/s/3178421/1>)

- b. It's a good thing I left and soon many others will too. People are used and tossed out. Never had such an eye opening experience after I got a great new job with normal hours, more pay and **got respected by** my management.

(<http://www.failingenterprise.com/forums/showthread.php?t=1116&page=3>)

- c. After the order **got received by** the commander in space flights . . .

(<http://www.adequate.com/lego/reviews/Details/120.html>)

(10 a, b) の例で注目すべきところは、by の後の名詞句が everyone, my management となっていることである。誰にも恐れられる、あるいは、経営者達から尊重されるということは主語として表される人物に大きな影響を与えると見なすことができる。他方、(9 a, b) で John という一個人に恐れられたり尊敬されたりしても、主語 (Harry, Mary) にはほとんど影響がない。(9 c) と (10 c) の違いも同じように説明できる。このことは、一般的に言って、get 受身文の主語は何らかの影響を受けるという性質 (受影, affected) があるということと関係する (後述)。もしそうなら、(9) の get 受身文で by 句が不適格であることは、Fox and Grodzinsky の主張と関係がないことになる。

実際、「get 受身文の by 句は Affector の意味役割を持つ」という Fox and

Grodzinsky の主張に反して、BNC に現れる by 句付きの get 受身文を精査してみると、通常の be 受身文に見られる by 句と同じ広範囲の意味概念に及んでいることが判明する。

(11) get 受身文における by 句の意味（例はいずれも BNC から）

a. 人間動作主

I got booed by a lot of people. / How come she got invited by the Reagans?

b. 動物動作主

I got bitten by a rat. / These small animals get eaten by fish.

c. 乗り物

How on earth can you get hit by a train? / I got zapped by a flying saucer.

d. 道具・手段

You must be terribly careful that you do not get pricked by a needle.

You can walk down almost any High Street in Britain and get conned by false sale posters in shop windows.

e. 原因・出来事

The Palestinians got devastated by this invasion. / They rarely get modified by experience.

f. 自然現象

If your home got hit by a tornado . . ./ [My arm] got burned by the heat of the platform.

g. その他

Tracks get covered by wind-blown sand in minutes.

. . . so that the fish do not get damaged by mishandling.

Fox and Grodzinsky は、Affector の定義を明確にしていないが、もし(11) に見られる総ての by 句を Affector と見なすのなら、Affector の意味範囲は、結局、外項 (external argument) と同じになってしまう。しか

も、Fox and Grodzinsky は Affector の 1 つとして Creator (7c) を挙げているが、実際には Creator は get 受身文に現れない（あるいは、現れにくい）。

- (12) a. *A new book got written by John. Cf. a new book by John
- b. *A house got built by John.
- c. *A cake got baked by Mary.

ここでも、名詞句の by 句と get 受身文の by 句との相関性は崩れることになる。

ここまで内容を整理しておこう。get 受身文では by 句が少ないものの、決して不可能ではない。しかも、by 句が表す意味の範囲は be 受身文の場合と変わらない。おそらく唯一の相違は、get 受身文の by は Creator の解釈を持たないことであるが、これは後に第 5 節で述べる特性から導き出すことができる。従って、get 受身文の by 句を、be 受身文の by 句と区別して、純然たる付加詞と見なす理由はない。be 受身文でも get 受身文でも、by 句は Grimshaw (1990) の「項付加詞」に当たる。ところが奇妙なことに、get 受身文では、by 句はコントローラーとしての機能を果たさないため、統語的な資格を有さないと考えられる。by 句が項付加詞でありながら、統語的機能を有さないというのは意味役割理論から見て明らかに矛盾している。この矛盾を解決する方法として、Fox and Grodzinsky (1998: 314 fn.4) は get 受身文の受身分詞は形容詞的受身であろうと推測している。もし形容詞的受身が統語部門ではなくレキシコンで作られるとすれば、by 句が統語的な資格を有さなくとも不思議ではない。そこで、次節では get 受身文の受身分詞が本当に形容詞的受身なのかどうかを検討する。

4. 受身分詞の性質

get 受身文に現れる受身分詞が形容詞かどうかは、通常の形容詞および形容詞的受身と比較すると明らかになる。

(13) a. John got very {tired/anxious}. (形容詞)

b. *John got very criticized. (get 受身)

(14) a. John got too tired to speak. (形容詞)

b. *John got too criticized to speak. (get 受身)

(13 b) と (14 b) の非文法性は、get 受身の受身分詞が形容詞ではないことを物語っている。それどころか、get 受身は be 受身と同等の統語的振舞いを示す。

(15) 二重目的語構文で直接目的語を保持できる : I was babysitting at a huge house, and I **got paid a lot of money**, but the kid was a total brat!

(http://kids.pbs.org/itsmylife/money/babysitting/you_said_it.html)

(16) 目的格補語を保持できる : If I ever **got made Sergeant**, I would never treat a man the way I was treated. (BNC)

(17) 不定詞補部を保持できる : Henry Dorsett, who **got known to be a man** for the “hard jobs” as he worked his way up.

(<http://www.votr-mag.com/?p=94>)

(18) 与格目的語を取ると考えられる動詞 thank (Wasow 1977) の受身形が可能である : I **got thanked** by many people a billion times today.

(<http://emu-head.diaryland.com/index.html>)

(19) 与格目的語を取ると考えられる動詞 help (Wasow 1977) の受身形が可能である : Just try to help kids like I **got helped** when I was younger.

(<http://www.ocala.com/apps/pbcs.dll/article?AID=/20060827/NEWS/208270355/0/APA+rel=0>)

Cf. John always seems* (to be) thanked/helped by his friends.

(Wasow 1977 : 346)

これらの統語的性質は形容詞的受身には見られない。

get 受身文の受身分詞が形容詞的受身でないことは、語彙的意味の観点からも裏付けられる。一般に、形容詞的受身は行為や出来事の結果として生じる状態を表し、語彙概念構造 (LCS) において BECOME の概念を含んでいなければならない (影山 1996)。したがって、hit, kick, kiss のように接触・打撃など働きかけ (ACT ON) しか表さず変化結果を含意しない動詞からは、形容詞的受身を作ることができない。ところが、これらの動詞も、be 受身文および get 受身文では受身分詞として現れることができる。

- (20) a. They **got kicked and hit** by the Corporals. (BNC)
- b. With a title like NEVER BEEN KISSED, you kind of figure out that the point of the movie is to have Drew Barrymore's character at some point finally **get kissed**, and as it ends up . . . well, just go see the movie.

(<http://www.angelfire.com/ky/wesreviews/neverbeenkissed.html>)

以上の観察から、get 受身文の受身分詞は形容詞的受身ではなく統語的受身であると結論づけることができる。McIntyre (2005 b) は、当該の受身分詞が Embick (2004) の言う意味での結果分詞 (resultative participle) に該当することを示唆しているが、この考え方も、(20)で示したように ACT ON 動詞でも get 受身になるという事実からすると首肯しがたい。

5. 主語名詞句の性質

これまで受身分詞と by 句の性質を見たところで、最後に get 受身文の主語名詞句の性質を検討する。Lakoff (1971) は、be 受身文と get 受身文では主語の意図性に次のような相違が見られることを観察している。

- (21) a. Mary was shot on purpose. ('Someone purposely shot Mary.') (Lakoff 1971: 156)
- b. Mary got shot on purpose. ('She purposely got herself shot.') (Lakoff 1971: 156)

文末に置かれた *on purpose* は, *be* 受身文では元来の動作主（上例では省略されている *by* 句）の意図を描写するのに対して, *get* 受身文では表面上の主語 (*Mary*) の意図を表す。すなわち, *get* 受身文の表面上の主語は意図性を持つことができる。このことは, 義務を表す法助動詞 (*must*) を補った場合, (22 a) と (22 b) のような違いとして現れる。

- (22) a. Radicals must {*get/?be*} arrested to prove their machismo.
(Lakoff 1971: 156)
- b. Radicals must {*be/?get*} arrested if we are to keep the Commies from overrunning the U. S. (Lakoff 1971: 156)

Givón and Yang (1994) も, *get* 受身文の主語は出来事に対する制御力 (control) や責任 (responsibility) を担うとしている。

しかしながら実際には, *get* 受身文の主語が常に意図的な動作主で, 自ら進んでその行為を受けるとは限らない。(23) のように主語が *willing* な場合も, (24) のように *unwilling* の場合もある。

- (23) a. My friends would have **willingly got arrested** protesting against the GST.
(www.smh.com.au/articles/2002/04/30/1019441368597.html)
 - b. On the bright side, Jill did show up to a league flag football game on short notice and **willingly got run over** by angry women while wearing jeans.
(<http://www.friendster.com/4980006>)
- (24) a. a gamekeeper's son who **unwillingly got dragged** along on an adventure
(<http://elfwood.lysator.liu.se/art/l/a/lassen/carden.gif.html>)
 - b. Months later, Molly **unwillingly got drawn** into Dusty's drama again.
(<http://soapcentral.com/atwt/whoswho/molly.php>)

更にまた, *accidentally* や *by accident* などの副詞との共起から分かるよう に, 主語が自分の意図や制御とは関係なく, 偶発的に出来事を被る場合もあ

る。

- (25) a. A young high school student **got shot by accident.**
 (<http://www.kemasa.com/insanityinc/insane0024.html>)
- b. The blades are designed to throw out anything which **accidentally get caught** in them. (BNC)
- c. “Did you know that early Christians practiced cannibalism?” “It’s true. I saw it on a program. They would draw lots and eat whoever **got chosen by chance.**”
 (<http://answers.yahoo.com/question/index?qid=20060818063256AAd7ao9&s=-date>)

このように、意図、制御、責任といった概念は get 受身文を決定的に特徴づける性質ではなく、せいぜい語用論的に得られる含意と考えるのが妥当であろう。

Siewierska (1984: 135) によると、Stein (1979), Hatcher (1949), Shopen (1972), Chappell (1980) は、get 受身はその出来事に対する話者の主観的な受け止め方を表すとしている。たとえば、

- (26) a. How did you get rejected by another firm?
 b. Did you get rejected by another firm?
 c. How did you get invited to give a concert in Sydney?
 d. Did you get invited to give a concert in Sydney?

(Shopen 1972; Siewierska (1984: 135) に引用)

(26 a, b) では、主語 (you) がまた就職に失敗したことに対して話者は同情しているし、(26 c, d) では、主語が演奏の招待を受けたことに対して話者は素晴らしいことだと喜んでいる。筆者の調査でも、幸運を表す場合と不運を表す場合の両方があった（ただし、Downing (1996) でも指摘されているように、比率としては迷惑 (adversity) の例の方がはるかに多い。）。たとえば、同じ kiss という動詞でも、(27 a) は幸運を、(27 b) は迷惑をほのめかしている。

- (27) a. I spent Hogmanay 1999/2000 in Edinburgh . . . just walking

down the street I got kissed by several lovely young women. I like those Scotish traditions!

(<http://www.wordforge.net/showthread.php?goto=lastpost&t=39307>)

- b. Yesterday at a youth group party my best friend got kissed by the boy I like. I don't know if I should be mad cuz I certainly am SAD!!!!

(<http://www.angelfire.com/magic/letscheer>)

get を be に置き換えると、そのような主観的なニュアンスは生じない。

しかしながら、このような主観的な感情も get 受身文に特有だというわけではない。次のように get を本動詞として用いた場合にも、そのようなニュアンスは感じ取ることができる。

- (28) a. My sister got the flu. (可哀想に)
- b. My sister got the first prize. (それは素晴らしい)

従って、この種の感情は受身分詞によるのではなく、get という動詞そのものの性質に由来すると見なされるべきである。

このような主観的感情を語用論の問題として除外すると、get 受身文として重要なのは、主語が何らかの影響 (affected) を受けるということである (Arce-Arenales, Axelrod, and Fox 1994, Downing 1996, Taranto 2004)。ここで影響というのは、状態変化や位置変化といった概念的意味に限られず、物理的、心理的、あるいは社会的な影響も含んでいる。

- (29) a. Her talk {was/*got} followed by a presentation on syncrētism
- b. Egbert {was/got} followed by a spy.

(Taranto 2004 ; McIntyre 2006 に引用)

- (30) a. {The fresh paintwork/*The lake} got rained on.
- b. {The band/?The TV program/*The volcanic eruptions} got watched by several people.

(Taranto 2004 ; McIntyre 2006 に引用)

get 受身文の主語が、受身分詞が表す出来事や行為によって何らかの影響を受けるということは、言い換えると、get 受身文の主語は既に何らかの実体がなければならぬことである。形のないものは影響を受けることができない。実際、Chappell (1980) や McIntyre (2005 b, 2006) が指摘するように、作成 (creation) を表す動詞は get 受身になりにくい。

- (31) a. The steam engine {was/*got} invented by James Watt.
(Chappell 1980)

b. A CD got burned {in the fire/??with a CD burner}.
(McIntyre 2006)

同じ burn (31 b) でも、「燃やす」という意味の場合は既存物の状態変化であり、「CD を焼く（作る）」という意味の場合はゼロからの作成である。

筆者の調査でも、kick a hole, dig a pit, bake a cake のように作成を表す場合、be 受身文は例があるが、get 受身文の例は見つからなかった。

- (32) a. A hole {was/*got} kicked through the wall of an adjacent office, and cash was stolen.

(was の例は http://findarticles.com/p/articles/mi_m1282/is_21_56/ai_n13661952?)

- b. A pit {was/*got} dug at the end of the garden.

(was の例は http://experts.about.com/e/p/pi/picpus_cemetery.htm)

ただし、Downing (1996) と McIntyre (2005 b, 2006) が指摘するように、作成動詞が使われても、作成物が既に話題にのぼっていて、その姿形が話者の頭の中に描かれているような場合は、get 受身が可能である。その場合、話者の頭の中では、本当の意味での作成ではなく、既存物の状態変化として認識されている。筆者の収集例においても、作成物が既に話題に出ている場合は get 受身が成立する。次の例で、主語が定冠詞で表示されていることに注意。

- (33) a. Now, where was I? Oh, yes, little Eric's birthday. Well, the cake got baked eventually, and the table was all set up

ready.

(<http://scallywaggles.blogspot.com/category/carlson-family>)

- b. **The light rail system** as approved by voters two years ago is going to have a very difficult time **getting built**.

(<http://www.seattleweekly.com/news/9934/impolitics-parrish.php>)

以上、get受身文の主語が持つ特徴としてしばしば挙げられる性質のうち、意図、制御、責任、幸・不幸のニュアンスなどはget受身文に絶対的に成立するものではないため、語用論的なものとして除外すべきであることを述べた。get受身の意味論として真に重要なのは、主語がその出来事や行為によって何らかの影響を受けるという性質である。しかしこの性質も、getという動詞の本来的意味によると推測できる。

6. get受身文の理論的分析に向けて

前節までの観察をまとめると次のようになる。

- 統語的な性質：by句は項付加詞であるが、統語的な資格がない。
- 意味的な性質：主語が出来事や行為によって何らかの影響を受ける。
- 語用論的な性質：意図、制御、責任、迷惑などのニュアンスを伴うことが多い。

このようにget受身文の性質が複雑であるのは、受身分詞の性質の上に動詞getの性質が重なっているためである。get受身文のgetは本来の語彙的動詞としてのgetの性質を残している。主観的ニュアンスや主語の受影性は、本動詞としてのgetの性質と同じである。たとえば前述(30)の例は、本動詞としてのgetを用いて次のように言い換えることができる。

- (34) a. {The fresh paintwork/*The lake} got a lot of rain on it.
 b. {The band/The TV program/*The volcanic eruptions} got a lot of watchers.

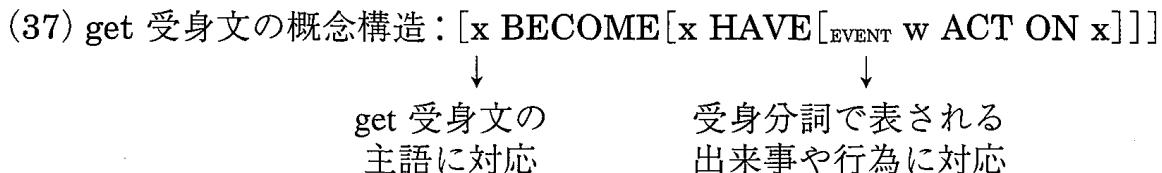
受身形を使わず単に get だけを用いても、(30) の許容度の差と同じ差が現れる。このことから、get 受身文の理論的な分析においては、get という動詞の意味構造を明らかにすることが先決だということになる。get の LCS は概略、(35) のように考えてよいだろう。(ただし、get のクオリア構造の主体役割（影山 2005）として、主語の予備的行為——get と言うためには、主語がそれを得ようとして何らかの行為を先に行うはずである——が記載されている。運・不運といったニュアンスはこのクオリア構造から生じるのではないかと推測できる。)

(35) $x \text{ get } y : [\text{x BECOME } [\text{x HAVE } y]]$ ($x = \text{get}$ の主語, $y = \text{get}$ の目的語)

(35) は、get の基本的な概念を「come to have (持つようになる)」と規定している。BECOME は到達 (achievement) を示し、これによって、get 受身文も完結アスペクト (telic) になる。

(36) The shirt got washed {in/*for} ten minutes.

Harley (1995) や McIntyre (2005 a) も、get を BECOME HAVE に分解しているが、彼らが [BECOME [x HAVE y]] という構造を想定するのに対して、(35) では、BECOME の前に主語を想定している。影山 (1996) で論じたように、「芋を焼く」のように変化主体がもともと存在する場合には、BECOME の前に主語項が想定され、他方、「ケーキを焼く」のように作成を表す場合には BECOME の前に主語項が想定されない。第 5 節で論じたように、get 受身文の主語が Affected という性質を持つことは、その主語が、語彙概念構造において BECOME の前に設定された主語項に当たると解することで説明できる。たとえば John got hit by a car. という get 受身文の概念構造は、「ジョンは、車に衝突されるという出来事を所有した (被った)」と理解できる (「ジョンが不注意だったために」といったニュアンスは、上述のクオリア構造の主体役割に依ると考えられる)。



ただしこれは、get 受身文が概念構造で作られるという意味ではない。

(37) に略述したように、概念構造と統語構造がそれぞれ対応して、独自に存在すると考える。この考え方には、統語構造と意味構造を一体化して、get という動詞を統語構造において HAVE という形態素と BECOME という形態素に分解するという分析 (Harley 1995, McIntyre 2005 a) と異なる。筆者の立場と Harley の立場の優劣をここで論じる余裕はないが、最終的には統語的な性質と意味的な性質、さらには語用論的な性質をふるい分けることのできる理論が望ましいと考えられる。

理論的な問題点を整理すると、(I) 主語の「受影」という意味の性質と、主語が名詞句移動によって派生される (Haegeman 1985) という統語的な性質をどのように両立させるか、そして (II) by 句の特異性をどのように説明するか、という 2 点に集約できる。問題 I に関して、get 受身文の主語はもともと主語位置に基底生成されるという分析もあるが、既に見てきたように、get 受身文の主語は人間名詞だけでなく無生物名詞のことも多い。また、Fox and Grodzinsky (1998) と McIntyre (2006) が指摘するように、イディオムの一部が get 受身の主語になることも可能である。そのような例に鑑みると、get 受身文の主語は、基底生成されるのではなく、be 受身文の主語と同じように統語構造で目的語位置から空である主語位置に移動すると考えざるを得ない。しかしそうすると、get 受身文の主語が持つ「受影」という性質がどこから生じるのかは、統語構造だけでは説明できないことになる。変化対象が既存物であるという性質を説明するためには、統語構造とは別に、(37) の概念構造に言及しなければならないのである。問題 II (by 句の特異性) も、統語構造と概念構造との連携によって解決できるのではないかと思われる。

参照文献

- Arce-Arenales, Manuel, Melissa Axelrod, and Barbara Fox (1994) "Active voice and middle diathesis : A cross-linguistic perspective," in Barbara Fox and Paul J. Hopper (eds.) *Voice : Form and Function*, 1–21. Amsterdam : John Benjamins.
- Bolinger, Dwight (1975) "On the passive in English," *The First LACUS Forum*, 57–77.
- Chappell, Hillary (1980) "Is the *get*-passive adversative?" *Papers in Linguistics* 13 : 411–452.
- Collins COBUILD (1996) *Grammar Patterns 1 : Verbs*. London : Harper Collins.
- Downing, Angela (1996) "The semantics of *get*-passives," in Ruqaiya Hasan, Carmel Cloran, and David Butt (eds.) *Functional Descriptions : Theory in Practice*, 179–207. Amsterdam : John Benjamins.
- Embick, David (2004) "On the structure of resultative participles in English," *Linguistic Inquiry* 35 : 355–392.
- Fox, Danny and Yosef Grodzinsky (1998) "Children's passive : A view from the *by*-phrase," *Linguistic Inquiry* 29 : 311–332.
- Givón, T. and Lynne Yang (1994) "The rise of the English *get*-passive," in Barbara Fox and Paul J. Hopper (eds.) *Voice : Form and Function*, 119–149. Amsterdam : John Benjamins.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, Cambridge, MA : MIT Press.
- Haegeman, Liliane (1985) "The *get*-passive and Burzio's generalization," *Lingua* 66 : 53–77.
- Harley, Heidi (1995) *Subjects, Events, and Licensing*. Ph.D. dissertation, MIT.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論－言語と認知の接点－』 くろしお出版.
- Kageyama, Taro and Hiroyuki Ura (2002) "Peculiar passives as individual-level predicates," *Gengo Kenkyu* 122 : 181–199.
- Kilby, David (1984) *Descriptive Syntax and the English Verb*. London : Croom Helm.
- Lakoff, Robin (1971) "Passive resistance," *CLS* 7, 149–162.
- McIntyre, Andrew (2005 a) "The semantic and syntactic decomposition of *get* : An interaction between verb meaning and particle placement," *Journal of Semantics* 22 : 401–438.
- McIntyre, Andrew (2005 b) "Aspects of the grammar of *get*." <http://www.uni-leipzig.de/%7Eangling/mcintyre/uses.of.get.pdf>
- McIntyre, Andrew (2006) "*Get*-passives, silent reflexive/middle morphemes and

- the deconstruction of causation." <http://www.uni-leipzig.de/~angling/mcintyre/get.passive.handout.pdf>
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Shibatani, Masayoshi (1985) "Passives and related constructions," *Language* 61 : 821-848.
- Siewierska, Anna (1984) *The Passive : A Comparative Linguistic Analysis*. London : Croom Helm.
- Taranto, Gina Christine (2004) "An event structure analysis of causative and passive *get*." Ms. UCSD.
- Wasow, Thomas (1977) "Transformations and the lexicon," in Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, 327-360. New York : Academic Press.
- コーパス
- British National Corpus* (<http://www.natcorp.ox.ac.uk>)
- Collins Wordbanks Online* (<http://www.collins.co.uk/Corpus/CorpusSearch.aspx>)
- The Brown Corpus and the Lancaster-Oslo-Bergen Corpus* on the ICAME CD-ROM (1991) Norwegian Computing Centre for the Humanities, Bergen, Norway.